

「教師が意識を変えると授業が変わる」

松木 健一（福井大学）

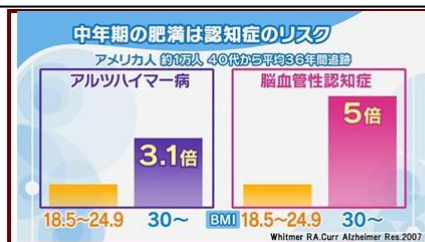
はじめに —「肥満」の話—

今日、みなさん方と一緒に話させていただきたいと思っていることは、「教師が意識を変えると授業が変わる」ということについてです。ただ、夏休みに入ったばかりでもありますので、ちょっと難しい話は横に置いて、気楽なところから話を始めたいと思います。

何をお話ししたらいいのかと思ったのですが、今、自分が一番悩んでいることをメインに取り上げようと思っています。それは「肥満」ということです。もし時間があれば「サル」の話、これは先ほど校長先生のお話の中にあった仲良くなるということが学びにとってどんな意味があるのかということについて時間があれば考えたいと思います。まずは「肥満」ということについて一緒に考えていただければと思います。

画面越しですので先生方お一人お一人の様子はよく分からないのですが、おそらく何割かの先生は体重を減らしたいと思っていらっしゃるのではないかなという気もしております。

ということで、体重が気になりませんか。私は身長が175センチあるのですが、体重も75キロぐらいありまして、何とか70前後ぐらいにならないかなと思っているのですが、なかなかそうならないのです。体重を減らすことは、全てにわたっていいことだと思えることが多々あります。健康に



肥満 が起こす病気

糖尿病	高血圧	脂質異常症
高尿酸血症・痛風	狭心症・心筋梗塞	
非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD)		
脳梗塞	月経異常・不妊	腎臓病
睡眠時無呼吸症候群		
ひざ・股関節・背骨・手指関節の障害		



健康にもよい



地球環境にもやさしい

(CO₂の削減・食料不足)

世界の温室効果ガスの総排出量のうち、畜産業だけで14%に(牛のゲップ)

食用作物41品目の収穫物が世界全体で総計9.46兆カロリー分生産されました。このうち55%が人間の食用、36%が家畜飼料、9%が工業やバイオ燃料として利用されました。

日本の肉消費量からみる
温室効果ガスの排出量は?

1人当たりの
年間消費量

排出量を
ガソリンに換算

豚肉 12キロ → 約40リットル分
牛肉 6キロ → 約60リットル分
鶏肉 13キロ → 約20リットル分?

(2018年度食料需給表を基にし、ガソリンのCO₂排出量は環境省公表の排出係数から2.32キロ/リットルとして試算)

もいいですし、地球環境にも優しいですよ。

健康のことを考えると、肥満が引き起こす病気、糖尿病、高血圧、脂質異常、それから股関節等の問題。挙げればきりがありません。加えて、肥満があると起きやすいがん、特に閉経後でしたら乳がん、大腸がん、肝がん、これらはほとんど肥満ということと強く関係しているようです。それから、認知症、これもアルツハイマーの場合は3倍、脳血管性の認知症の場合は5倍あるそうです。やはり、少しずつ歳が気になったら、体重を減らしていくということを考えなくてはならないと思います。

こういった自分のことだけでなく、地球環境にも優しいんですよ。CO₂の削減ということを考えると、世界の温室効果ガスの総排出量のうち、畜産業だけで14%だと言います。牛のゲップというものが二酸化炭素の排出の大きな原因になっているようです。そして、牛肉6キロを生産するのに、ガソリンに換算すると60リットル、一回給油して満タンにしたものを全部燃焼してCO₂を吐き出すのと同じくらい牛肉の生産ではCO₂が出てしまうということでもあります。

食料不足ということに関しても、食用作物41品目は世界全体で9.46兆カロリー生産をしているようです。このうち55%は人間が食べている。ところが36%は家畜の飼料になっているわけですよ。先進諸国等でたくさん肉を食べることがどれだけ食料不足を助長しているかということでもあります。おいしいものがあると食べたいと思うのは人情ですが、36%を地球全体の食料に回すことができればもっと地球自体、人類に優しいということになるのではないかと思います。

体重を減らすことは難しい — 分かっちゃいるけど変えられない生活習慣 —

やっぱり痩せないとまずいなと思いますね。太り過ぎの解消は人類にとって非常に重要な課題だということは分かっているのですが、体重を減らすことは難しいですね。これまでの生活習慣そのものを見直すことになるから、自分自身の生活を見直さないとなかなか体重を減らしていくことは難しいことじゃないかなと思います。

かといって、安易な解決策では長続きしませんよね。BSの番組なんかを見ると、コマーシャルのほとんどは栄養関係、健康関係のものばかりですよ。ということは、これを見ている世代が大体そういう世代ということだということにもなるかなと思いますが、ついつい買っちゃうんですよ。「食べても体重を減らせるサプリがあるよ」と聞くと、「本当かな」とつい買ってしまふ。でも長続きはしないですよ。それに、一挙にやせてもすぐにリバウンドしてしまいます。これは人間にとって重要な能力でもあります。危機に瀕して体重がどんどん減った時にそれを回復できる能力を元々もっているということでもありますので、一挙に痩せようとしてもダメなわけです。

では、どうすれば体重を減らすことができるか。これもみなさんご存知のこと、それしかないと思います。

やっぱり、適度な運動です。栄養を摂るということだけではなくて、それを燃焼させる、燃やすということをセットで考えなくては体重を減らすことはできません。摂るのを制限するだけではなくて、使うということも同時に考えるということです。

それから、バランスの取れた栄養。偏食、食事抜きで暮らすなんていうのはダメですよ。バランス良く食事を摂りながら生きていくということが重要だということでもあります。

規則正しい生活、つまり自分の身体と対話をする時間をきちんと取っていく。「今日は寝不足じゃないかな」とか「今日の食事はこの時間になつたらしくちゃいけない」というような身体との対話というも

太りすぎの解消は
人類にとって重要だ

でも、
体重を減らすことは難しい！
これまでの生活習慣そのものを見直すことだから

かといって

BS番組で何とダイエットのための
サプリメントCMが多いことか

安易な解決策では、長続きしない

一挙に痩せようとしてもリバウンドする

では、
どうすれば体重を減らすことが出来るのか！

何とかなる

適度な運動 摂取⇔燃焼 分かっているけれど

バランスの取れた栄養 バランス 変えられない

規則正しい生活リズム 身体との 結局

ストレスの少ない生活 楽しむ生 回もしない

話し合える仲間 励まし合い・相互調整・食卓

安心感

のが重要になります。

それからちょっと難しいですが、ストレスの少ない生活。生活を楽しむことが極めて重要ですよ。

それともう一つ、実は、仲間がいるというのはとってもいいですよ。お互いに励まし合い、相手に話そうと思って言葉にするわけですから、自分の肥満の状態についてもリフレクションを行うことができます。

この5つのことが体重を減らすという意味では常道ではないかと思います。ところが、これが難しいですよ。「分かっちゃいるけど、まあ何とかかな」と思ったり、「分かっているけど変えられない」と考えたり、「私はまだ大丈夫じゃないかな」という根拠のない安心感みたいなものがあったりして、結局何もしない。あるいは何度も試みるけれど変わらないのでもうしないといった状態になっていらっしゃる方が私も含めて多いのではないかと思います。それだけ、分かっているんだけれど変えられないというのが、体重を減らしていくということに関しての状況ではないかと思います。

「体重を減らす試み」と「学習観の転換」

ところで、この体重を減らしていく試み、これに非常によく似た取り組みが学校の中にも多々あるように思います。それは何かというと、やっぱり一番大きいのは、今世紀最大の学校の課題、それは「学習観の転換」ということです。教える教育から学ぶ教育への転換、これが今世紀、何とかして実現しなくてはならない課題でもあります。このことは、先ほどの肥満ということとよく似ていますよね。もしかしたら、肥満を解決できると、今のことも解決できるかもしれない。そんなふうに、肥満の対策と学習観を転換していくということを比べながら考えてみたいと思います。

先ほど、「体重が気になりますか」ということを聞きました。同じように先生方の中でも、やはりどこかで気になっていますよね。これだけ騒がしく「主体性」だとか、「主体的・対話的で深い学び」だとか言われてきますと、やはり学習観を変えていかなくてはならないと、指導伝達型の一斉授業から学習者中心の授業に切り替えなければいけないのではないかという気持ちはどの先生もお持ちではないかと思います。体重とよく似たような状況にあるのではないかと思います。

体重を減らすのは健康にも良いし、地球環境にも良い話です。学習観を転換するのは、今の社会では必須のことですよ。現在のように ICT が進んだ世界、10 数年、20 年経たないうちに AI の浸透によって人の職業の半数近くが変わっていくということが、もう何年も前から言われていますよね。AI に打ち勝つ力をつけていくことが必須であることがもう分かっているわけですから、学習観は変えなくてはならないですよ。加えて、それはその子にとってだけではなくて、全ての社会、全ての国にとって今重要な課題になっています。OECD をはじめとして、世界中で何とかして早く学習観を転換しよう、新しい社会に適應できる教育に切り替えていこうと躍起になっています。

学習指導要領もそのひとつですね。これは以前に見ていただいたかと思うのですが、学習指導要領では、知識や技能に加えて、思考力・判断力・表現力、人間性・学びに向かう力ということが求められていますよね。この3つのことを培うことが求められてきているわけです。ただ、これまでのことを考えると、この3つの中でやっぱり学習活動というと、知識・技能の部分、これが大きな比重を占めていたと思います。それはある意味致し方ないことでもありますよね。大学の入学試験はまさに知識を問うわけです。

肥満課題と同じ

今世紀最大の学校教育の課題

学習観の転換

教える教育から学ぶ教育への転換

体重が気になりますか
(あと5kg減せたくありませんか)

学習観の転換が気になりますか

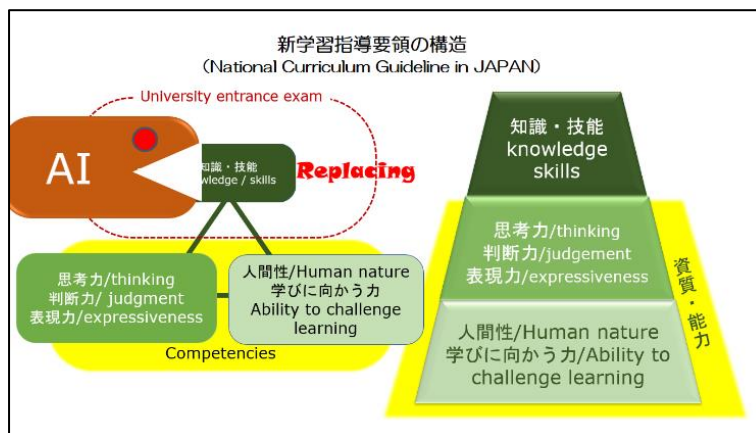
本当は、指導伝達の一斉授業から
学習者中心の授業に
切り替えたくありませんか

体重を減らすことは、
健康にもよい
地球環境にもやさしい
(CO₂の削減・食料不足)

学習観を転換することは、
Society5.0に適合(AIに打ち勝つ)できる
主体的でやる気のある子どもを育てることが
できる(OECDをはじめ世界が学習観を転換しようとしている)

から、これを身につけさせなければ学校教育としては耐えられない。どうしても知識や技能を優先するというのがこれまでの学校の中で多かったように思います。ところが先ほどお話したように、AI等が浸透する中でこのウエイトをもう少し小さくしてコンピテンシー、思考力・判断力・表現力、人間性・学びに向かう力をつけていこうという方向に学習指導要領が変わってきています。

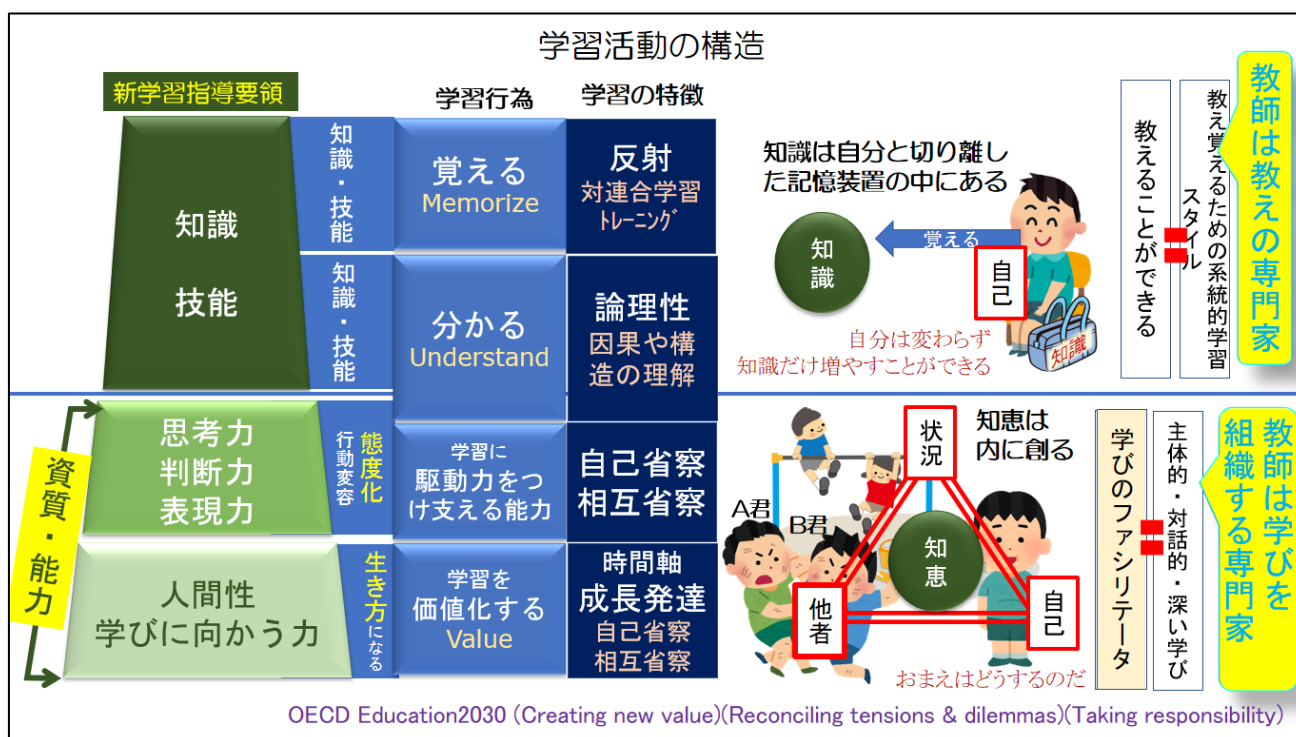
繰り返しになりますが、知識の部分に関してはAIに取って代わられるということがかなり増えてきているということでもあります。もちろん、知識ということ、学びということを抜きにした教育はあり得ません。ですから、これを軽視していいという話ではないんです。ただ、これからの社会はそうじゃない部分についてきちんと自覚していかななくてはならないということでもあります。この3つ、構造的に見ると、一番ベースにあるのが人間性・学びに向かう力ですよね。そこから思考力や判断力・表現力が生まれ、その上で知識や技能が使われていくということでもありますよね。これについて、もう少し詳しく見ておきたいと思います。



「学習活動の構造」 — 教師は「教える専門家」から「学びの専門家」へ —

これも以前見ていただいたことがあるのではないかと思います。それぞれ知識や技能、思考力・判断力・表現力、人間性・学びに向かう力がどういう学習行為によって成り立つのかを考えた時に、知識や技能は覚えるという活動と分かるという活動が中心ですよね。思考力・判断力というのはなかなか言葉にはなりません、学習活動そのものを活性化させる、そういう支えになる力ですよね。それから、人間性・学びに向かう力というのは、学習を価値化することですよね。こういうことが私にとって重要なんだという、そういう価値を与えていく、無価値ではなくて学びに価値を与えていく活動だと言ってもいいかもしれません。思考力・判断力・表現力ということになると、行動を変容させていく、態度化していくことでもあるかと思いますし、人間性は生き方そのものと言ってもいいかもしれません。

その学習行為がどういう学習の特徴をもっているかということ、覚えることはトレーニングですよね。繰



り返すこと、ドリルです。繰り返し、繰り返しやって身につけるという学びの特徴をもっています。一方、分かるということは、事柄の論理、あるいは因果や構造を理解していくということになるわけです。

この2つの学習活動の特徴を絵に描いてみましたので見てください。今、子どもがいます。この子どもが知識を学習している場面を考えた場合に、子どもは一生懸命知識を習得します。習得するということはどういうことかという、子どもの記憶装置にたくさんいろいろな知識を詰め込んであげることになります。つまり、子ども自身はあまり変わらないんです。知識だけを増やしていく。カバンにたくさんの知識を持たせてあげれば、将来この子の役に立つんじゃないかというような発想ですよ。

ところで、この下の部分、思考力・判断力・表現力、人間性・学びに向かう力といったことはどういう学習の特徴があるのかということ考えた場合に、上の知識や技能とちょっと違ってきます。

例えば、自分がいる、目の前で仲のいいAさんとBくんがケンカをしている、その状況はみんなが仲良く遊んでいる場面か。こう考えた時に、「ケンカはしてはいけません」という知識をもっている、これは役に立たないですよ。ここで必要になる知恵って何なのか。この問題状況をどうやって解決するのか。「お前は どうするんだ」ということに答える能力です。仲のいいAくんをお願いするのか、いやどうもBくんの方が正しいということを主張するのか。この状況をどう改善するのかということが問われることになりますよ。

OECD の Education2030、そこで捉えている学力観はまさにこれに答える学力観です。こういう状況に接して Taking responsibility、どういうふうに責任を取るのか、お前は どういうふうに動くのか。そして、Tension、緊張とジレンマ (Dilemma)、仲のいいAさんとBくんがケンカをしている。仲のいいAくんの方が悪そうだ。ジレンマ、これをどうやって乗り越えるのか、Creating な新しい価値を生み出していくか。こういったことが問われていることになります。これに答える力というのが、今求められている力だと言ってもいいかもしれません。

知識や技能は、どれだけたくさんカバンの中に知識を入れて持たせてあげられるかということなんです。下の方のコンピテンシーとして培う力というのは、その場の状況をどうやって判断し、他者と自分との関係を結びつけた解決策を考えることができるかということが問われていることのように思います。そこで求められる学習の特徴としては、リフレクション (Reflection) ということです。自分のことを振り返ってみる。そして人と対話をしながら振り返って考えてみる。こういう力が特に必要になってきます。

特に、生き方とか価値観ということまで考えてくるようになると、その時その時の振り返りではなくて、「この一年間ぼくはどうだったんだろうか」「何をしてきたんだろうか」なんていう少し長いスパンの中で成長そのものを振り返ることが必要になるということでもあります。

ちなみに、上の方のことについては、知識・技能ですから教えることができます。教えることができるので、これまで昭和の時代は、教えて覚えるための系統的な学習、教科の系統化とか構造化ということに多くの先生方が取り組んできました。どれだけ子どもたちに負担をかけないできちんとした教科の構造を明らかにして、順を追って子どもたちに伝えていく。そのための努力を私たちは一生懸命やってきました。つまり、教師は教える専門家として力を蓄えていくことを一生懸命やってきたということになります。これが不必要になったというわけではありません。今も教科の系統性、教科を構造化していくということは極めて重要なことです。ただそれだけでは済まなくなったというところが違うのではないかと思います。

今求められているのは下の部分ですよ。そしてこれは教えることができないのです。知識としては教えることはできます。「ケンカはよくないことだ」とそれは教えることができます。でも、その力だけではこの状況は解決できないんです。解決できる力を培っていかうというのが、今、学習指導要領が求めていることでもあります。そのために、「主体的・対話的で深い学び」をしましょうという提案がされているわけです。

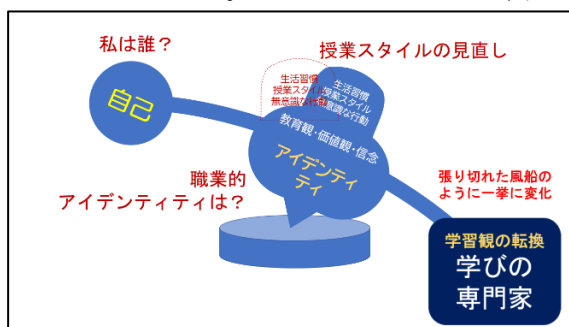
ここでちょっと誤解が起きているかもしれません。子どもたちに教える方法として「主体的・対話的で深い学び」をすると考えている方がいらっしゃるかもしれません。これは大間違いです。学びは教えることができないので、だから「主体的・対話的で深い学び」というやり方を取りましょうという提案をして

あるべきなのか、自分の職業の中で何を果たすことが社会にとって意味があるのか、そしてそれが自分にとって大切なのか。この2つのバランスの中で自分のアイデンティティというものができあがってきています。このようにバランスをとっているものですから、変えるというのは非常に難しいんですね。

ですが、今、急激にこのやじろべえがバランスを崩し始めています。学びの専門家へ切り替わらざるを得ないような状況が非常に増えてきています。ただ、なかなか気づきにくい。気づきにくいけれど、先生方の仕事の背後にある部分はもうかなり変わってきてしまっています。この中で、私は誰なのか。教えの専門家じゃないと言われたけれど、ではどうしたらいいのか。この見つめ直しをしていく中で、授業スタイルの見直しということを実現しなくてはいけないという極めて大きな、そして難しい課題に多くの先生方が直面しているということではないかと思います。

体重は減らせばいいということは分かっているけれど、安易な解決策では長続きしないし、一挙に痩せようとすればリバウンドする。同じことが学習観の転換でも起こっていますよね。学習観の転換は必要だ。それは分かっているけれど、かといって How to 的な解決策では長続きしませんよね。本屋さんに行くといろいろなものがああります。『10 分間で分かる主体性を伸ばす板書の仕方』とか『子どもがしたくなるワークブックの活用の仕方』、『すぐに分かる自主性を伸ばすグループ学習のあり方』、『10 分間読書が子どもの自主性を伸ばす』。そんな本が出ていると、ひとつやってみようかなという気持ちになりますよね。でも、それだけで先生方の学習観が変わるわけではないですよね。なぜなら、それは先生方の価値観にもなるから。そこを見直すようなことまで含めて考えないと How to 的な解決策だけに頼っていても切り替えはできないと思います。

加えて、一挙に学習観を変えようとしてもまたリバウンドします。学習観を変えなきゃいけないという話を聞いて、試みてみるのですが、一人で少しやってみても非常に大きな山ですので登り切れずに「ダメだ」と元に戻ってしまうということを、先生方は何度も繰り返しているのではないのでしょうか。



10分で作る主体性を伸ばす板書の仕方
子どもがしたくなるワークブックの活用
一挙に痩せようとしてもリバウンドする
毎日10分読書が子どもの自主性を育む

うまくいかなない

自身の教育観、教育の価値観、子ども観が変わってこない

かといって

How to 的な解決策では、長続きしない

一挙に**学習観を変えよう**としてもリバウンドする

体重が気になりませんか
(あと5kg痩せたくありませんか)

体重を減らすことは、
健康にもよい
地球環境にもやさしい
(CO₂の削減・食料不足)

でも、
体重を減らすことは難しい！
これまでの食生活そのものを見直すことだから

かといって
安易な解決策では、長続きしない
一挙に痩せようとしてもリバウンドする

学習観の転換が気になりませんか
(指導伝達の一斉授業から学習者中心の授業に切り替えたくなりませんか)

学習観を転換することは、
Society5.0に適合(AIに打ち勝つ)
主体的でやる気のある子どもを育てる
(OECDをはじめ世界が学習観を転換しようとしている)

でも、
学習観を転換することは難しい！
これまでの**自分の授業スタイル**そのものを見直すことだから (教育観・価値観・信念の見直し)

かといって
How to 的な解決策では、長続きしない
一挙に**学習観を変えよう**としてもリバウンドする

体重の話に戻ります。体重は気になる。減らすことは健康にも地球環境にもいい。でも減らすことは難しい。生活習慣そのものだから。かといって安易な解決策はダメだし、一挙にやってもリバウンドしてしまう。

同じことが学習観の転換でも起きています。学習観の転換は重要だ。いろんな意味で新しい社会に適応するにはそうしなきゃいけない。でも、転換するのは難しい。教師自身がもっている授業のスタイルを変えなきゃいけない。授業観を変えていかなくてはならない。だからといって、How to 的なものに飛びついて解決はしないし、すぐにリバウンドしてしまう。こんな状況に先生方はおかれているんじゃないかなというふうに思います。

では、どうすれば「学習観の転換」ができるのか

では、どうすれば体重を減らすことができるのか。これは先ほど5つ挙げましたよね。適度な運動、バランスの取れた栄養、規則正しい生活リズム、ストレスの少ない生活、話し合える仲間、そしてそれは栄養を摂るということだけではなくて、栄養を燃やすことまで考えなくてはいけないなどということを言ってきました。

同じことが、学習観の転換でも起きているように思います。

適度な運動、つまり入れるだけではなくて出すことが重要なんだ。覚えるというのは入れることですよね。入れることが学習だと私たちは思っていますが、それだけだと適度な運動をしていることにはならないんですよ。出すことが重要なんです。学習は入れる活動ではない。一緒にそこから創り出していく。それがすごく重要なことなのではないかと思います。

バランスが重要だ。栄養の要素はいっぱいありますよね。タンパク質、炭水化物、ビタミン、いろいろありますよね。実は学習もいろいろあるんですよ。だけど、この中の覚えていくということに特化したような学習をしていませんか。それは、バランスを欠いているということじゃないかなと思うんですよ。これをきちんとバランスのよい学習活動にしていくということが重要じゃないかと思います。

それから、規則正しい生活のリズム、これは身体との対話だと言いました。子どもとの対話が学習観の転換には重要ですよ。子どもとの対話、つまり子どもの学習の文脈をきちんと先生が読んでいくということを大切にするということが解決策としては重要になるのではないかと思います。

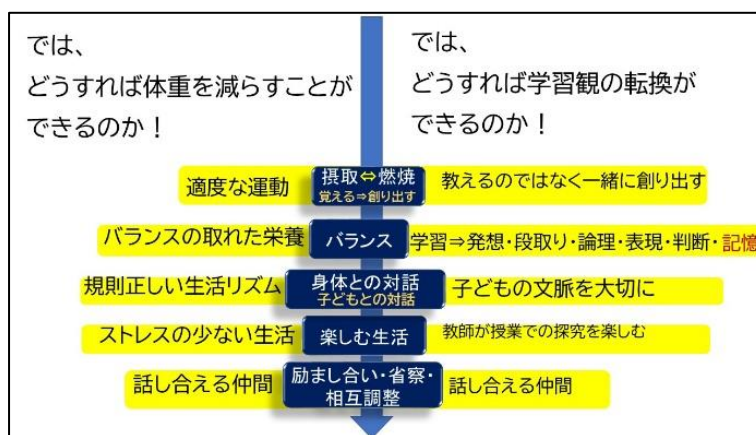
ストレスの少ない生活をする、これは生活を楽しむということだと言いました。教師が授業を楽しんでいるか、探究することを楽しんでいるかということが学習活動にとっては極めて重要ですよ。先生がおもしろがって授業をやっているかどうか、子どもはそれを見えていますよ。先生がおもしろくもなく、「伝えなきゃいけないな」と思ってやっている授業は子どもの方も「仕方ないな」と思って受けていますよ。「これはおもしろいな」って先生が喜んでいれば「何でおもしろいんだろう」って言いながらもそそられていきますよね。先生が楽しむということが学習活動にとって極めて重要です。

話し合える仲間がいる。これも重要ですよ。先生たち同士の間で話し合える仲間がいるということも重要ですし、子どもたち同士が話し合えるような仲間になっていくということも学習観の転換には必要じゃないかなというふうに考えます。

教えるのではなく一緒に創り出す

それでは、ここで取り上げた5つのことを一つ一つもう一回確かめてみたいと思います。

まず、最初に「覚える」、中に入れるだけではなくて、出すこと、創り出すことが大切だということについて、事例を見ていただこうと思います。



学校の事例ではありません。1歳3ヶ月、ようやく歩けるようになった子どもの様子です。ちょっと見ていただこうと思います。(動画①「アンパンマンのキャラクターを覚える1歳3ヶ月の男の子」を視聴)

親バカですね。できると確かめなくなっちゃうんですよね。もっとやらせなくなっちゃうんです。覚えさせなくなっちゃうんですね。覚えるっていう活動の魅力と言いますか、それは親も子もすごく感じている。でも、繰り返しそれをやられると子どもの方は嫌になっちゃうんです、だんだん。1歳3ヶ月の子ですら、さっきみたいな勢いではなくなってきた、もういいやという感じになってしまうんですね。子どもが一生懸命学んでいるのに、親同士が勝手な話をしているんですよ。失礼極まりないですよ。

でも、これって授業の中で時々やりませんか。あるいは、覚えさせるっていうことをはじめは子どもも喜んでくれるのでどうしても無理させてしまう。学校の中で起きていることとほとんど同じことが実は1歳過ぎの子どもたちの世界の中でも起きています。

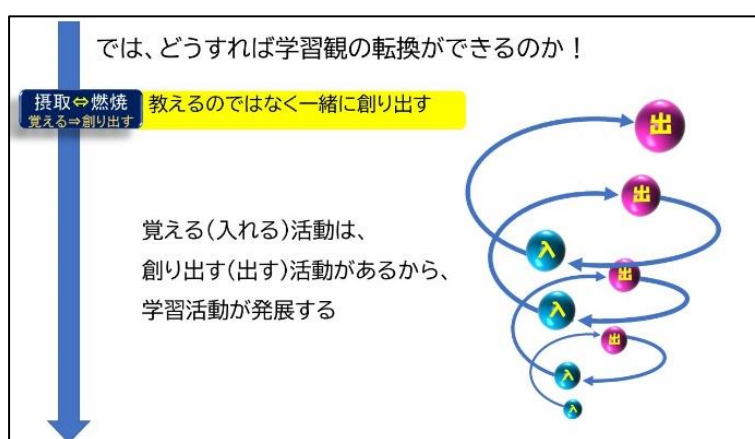
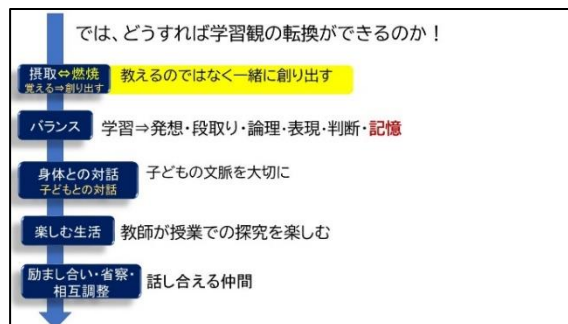
だんだん嫌になってきていますから、聞かなくなってきました。親は感じてないんですよ。子どもはだんだん学ぶことではない方に自分の気持ちを向けて心の調整をし始めます。食べることがだんだん増えていく。そのうちああいうふう(食べ物)を投げ始めます。いけないと分かっているんですよ。これを行うことで覚える活動はストップになります。授業以外のことに目を向けるようになってしまうということですね。もうしませんね、学習活動は。(動画終了)

やっぱり覚えるということは人間にとって大きな喜びです。だからどうしても子どもに覚えるということをやらせてしまう。ある限界を超えて子どもの主体性を犯してしまうということを、私たちは日常生活の中でもたくさんやってしまっていますし、学校の中でも多々起きているのではないかと思います。人間にとっての喜びというのは、覚えることだけじゃないですよ。この両親の言い訳気味な映像をちょっと見てもらおうと思います。(動画②「お母さんと一緒に手遊び歌で身体を動かす1歳6ヶ月になった男の子」を視聴)

これは3ヶ月後の様子です。お母さんは身重であまり動けない状態ですが、一緒にお勉強じみたことをやっています。一緒に活動するということが楽しいという状況に変わってきています。自分がやったことをお母さんもやってくれて、真似することができて、活動が楽しくなっている。(動画終了)

繰り返しになりますが、学習活動は入れる活動、覚える活動だけで成り立っているわけではないんですよ。同じくらい外に出す活動が重要になってきます。そして、その2つが交互にやってくるから活動が発展するし、学習活動が進んでくるんです。ところが、どうしても覚えさせなきゃいけないという思いがありますので、入れる活動の方に我々自身が重点を置きがちになります。そして、子どもと一緒に創り出すという活動が小さくなってしまう。こういった状況が学校の中では多々起きているのではないかと思います。

体重を減らすのに、適度な運動が必要だよ。入れるだけでなく出すことが必要だよ。同じように学習活動の転換をしていくという意味でも、覚える活動だけでなく、一緒に子どもと創り出したり、一緒にやることで楽しみを見つけ出したり、新しいことを発見していくということがないと活動って進展しないんだと、もう一度捉え直していただければと思います。



多様な学習活動をバランスよく取り入れる

さて、2つ目は「バランス」、バランスの取れた栄養を摂るんだという話をしました。学習活動についても同じことが言えます。学習活動には本当にいろいろなことがあります。覚えていくことも重要ですが、計画を立てる力だとか、段取りを組める力だとか、アイデアを出す力だとか、将来に向かってのビジョンをもてる力だとか、ものを分析的・論理的に思考する力、判断する力、決断して責任をとっていく力、それから言葉にして表現をして人と合意がつけられたり、相手を説得したり、協働したり、ジレンマの緊張を乗り越えていく力。こういったことが重要です。

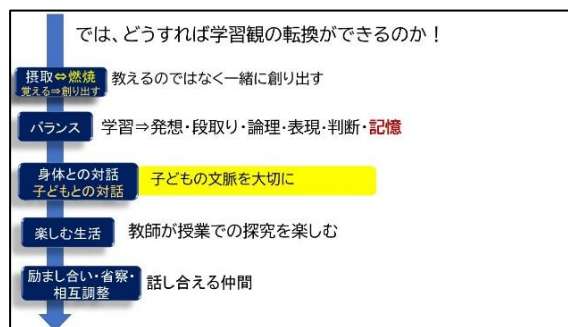
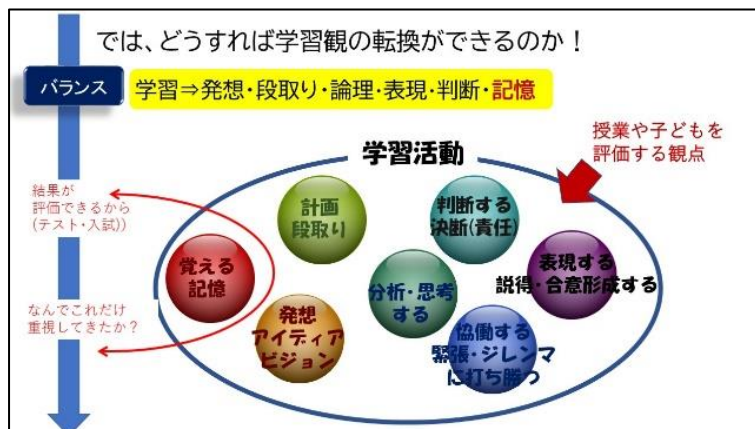
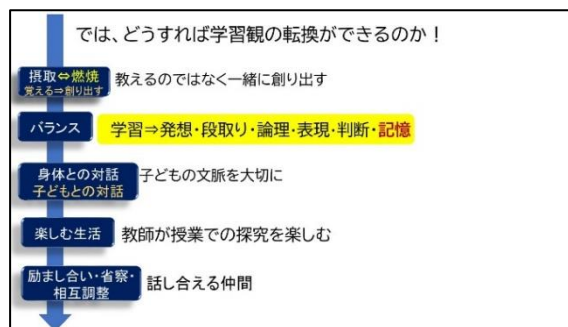
どうしてもこの中の覚えるところに力点がいきます。それは結果が分かるからです。目に見えてこの子はできるようになった、覚えることができたということが目に見えるようになるものだから、そこにどうしても重点がいきます。でも、学習活動にはそれ以外の要素がたくさんあります。実際我々の身の周りを見回していただくと、お勉強ができた子が社会に出て役に立っているかという必ずしもイコールではないです。リーダーとして活躍していく人、それはやはり判断力があったり、表現力があったり、他の人を説得したりする力があったりするわけですね。みんなで協働する時に、この人がいるとみんなが仲良くなって一緒に取り組めるんだよという人がいたりもします。社会が求めている力は本当にいろいろある。記憶して覚えていくという知識だけの力じゃないんです。他の部分が社会に出て必要とされている力だということは我々もよく分かっているんですよ。

ですから、今後授業をしていく中で、どれだけ学習ができたか、覚えたかということに目をやりがちですが、授業を評価していく時にそれ以外の点についてもちゃんと評価をする観点として自分の中にもっていないといけないなと思います。算数の授業をしていく中で、この子は本当に決断したかな、どういうふうに表示したかな、他の子をどう説得したかな。理科の授業をしていく中で、どういう段取りを組めたんだろうか。国語の授業の中で、どんなアイデアをこの子は考えついたのだろうか。それぞれの教科の中で、こういった覚えること以外の力がどのように見られるようになったのかということを、先生方が評価する観点として持っていけばきっと見つけられるのではないかと思います。そういう視点をもって授業をしていただくということではないかと思います。

子どもの文脈を大切にする

続いて、リズムのある生活をする、身体との対話をしていくということと同じで、子どもとの対話をきちんとする、子どもの文脈を大切にすることについて考えてみたいと思います。

先生方って忙しいですね。それは生活を見ても分かります。小学校だったら1日に5時間から6時間の授業の中で、45分過ぎたら次の授業の準備をしなくてはいけなくていいわけですね。そういうあわただしい生活をしています。放課後に明日の準備が全部できるかというと到底できないですね。そうすると、職員室から



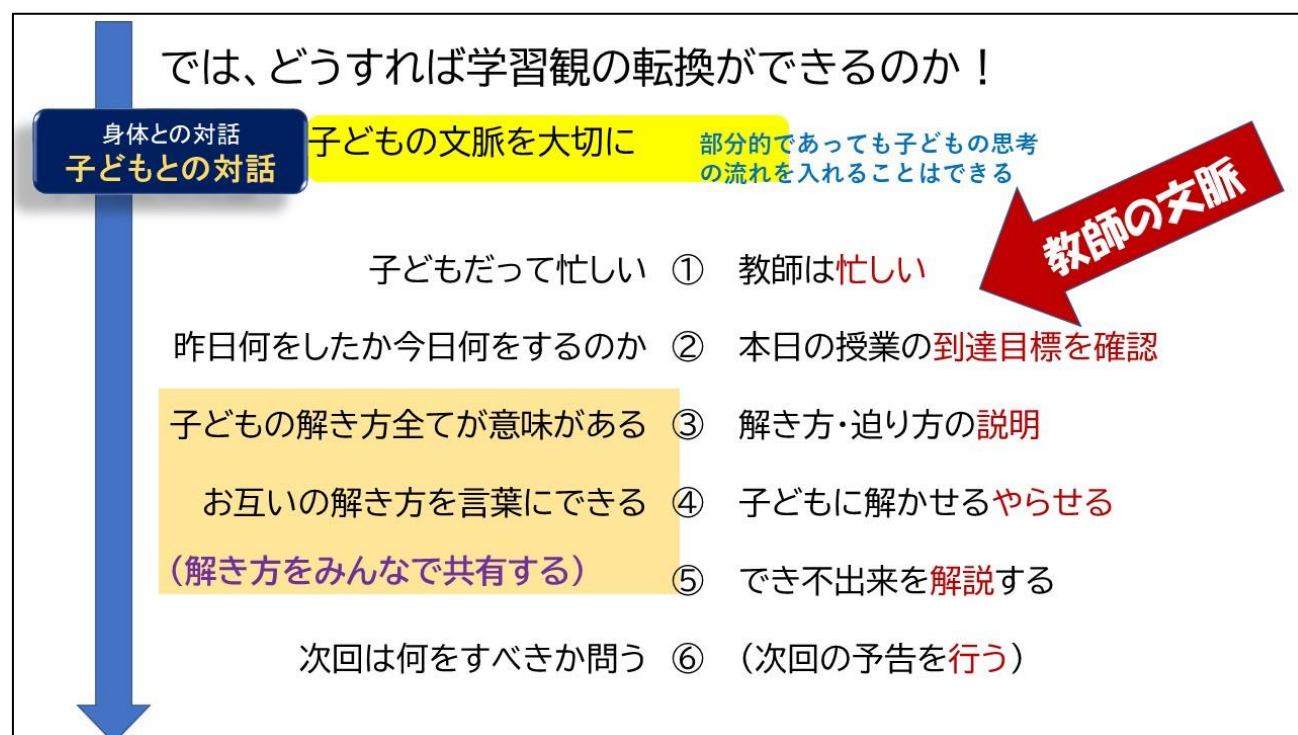
教室に走って向かう途中で、今日は何をやったらいいのかということを確認するなんていうことも結構やったりするのではないかと思います。でも、目標は確認しないと授業になりませんよね。確認して今日の単元の迫り方、解き方等を子どもたちに説明をしたりします。そして、実際に子どもにやらせてみる。やった結果、出来不出来がでてきますので、なぜそれがいいのか、なぜそこが難しいのかということについて解説をしたりする。そして、時間があれば「次回はこうしよう」なんてふうに次回の予告を行うといったことをなさっているのではないかと思います。

これって教師の文脈ですよ。忙しいからどうしても教師が考えた流れの中で授業を進めていくということが起きがちですよ。教師の文脈を大切にすることというのは、実は大切なことだと思っています。これは後で説明します。おそらくここで起きていることは、教師のものの考えによる文脈ではなくて、教科書の文脈ということなのかもしれません。まあ、致し方ない部分があるかなと思っています。でも、このそれぞれのところで、部分的であっても子どもの思考の流れを大切にしていくということ是可以すると思います。ごく当たり前の教師の指導型の授業をしていく中でであっても、部分的に子どもの思いを大切にしていくという授業は多々できるように思うんですよ。そんなことをちょっと考えてみたいと思います。

まず、忙しいのは先生だけじゃないですよ。子どもだって本当はやりたいことがいっぱいあるのに、よく我慢して椅子に座っていてくれますよね。もう感謝から始まらなくてはいけないという話かもしれません。

それで、今日の授業の目標を考えていくにあたって、先生は「今日は何々をやるよ。何ページを開いて」という言い方もあるかもしれないけれど、その前に「今日の算数の授業はどこから始めるんだっけ？昨日は何をやったんだっけ？」「ああそうか、昨日は何々さんがこういう話をしてくれたよね。そこでみんなでこんなことを考えたよね」なんていうふうに、子どもの思考の流れ、それをこの場に持ち出してくるということをしないと話にならないですよ。ものを考えるということは子どもが自分の思考をしないといけません。自分の思考の脈絡に沿ってそれを新しい思考に切り替えていく話なんです。新しい思考をプラスしてそこに付け加える話じゃないんです。元々ある思考の仕方そのものを変えていく話なんです。だから子どもたちがどういう思考をしてきたのか、それをもう一度授業の最初の場面で確認をしていくところから、子どもの思考を表に出すところから始めないと授業は始まらないんですよ。これだったらやれますよね。

それから、迫り方、解き方に関してですが、子どもはいろんな解決の仕方をする、あるいは間違ってい



るものも多々あるかもしれません。でも、間違いはないと思うんです。全てがその子もっている思考のプロセスならそうなる。そのプロセスのところを変えないと、先生が願っているものにはならないのかもしれませんが、子どもは子どもなりの論理があって、その誤りを犯しているわけですよ。だから、誤りとして見るのではないのではないと思います。全て子どものやっていることには意味がある。そして、その子どもの思考を言葉にする、それをみんなで共有するということが授業の中では極めて重要ではないかと思います。子どもが何か発言をした時、「今、Bくんが言ったこと、ちょっと分らなかったんだけど、Aくん、Bくんの言ったことはどういうことなんや？」なんて聞く先生がいたりしますよね。「Aくんの話を、Bくん、申し訳ないけれど組み立ててくれないか」と、「もう一度Bくんの言葉で、そのAくんの思いを言葉にしてくれないか」なんていうふうに先生が問うたりすると、子どもの思考を、一人の思考を先生とのやりとりだけじゃなく、学級全体の思考に切り替えていくことができますよね。お互いの解き方の中身を言葉にして言う。実は言葉にした段階でもうどれがいいのか悪いのかなんて判断を下さなくても、答えは出ているのかもしれません。「これが正しいよね」なんて詰めをしなくたって、子ども自身は「あっちの方がいいな」なんて思えるようになってきます。自分の思考を、プロセスを追いながら言葉にしていく。そして、今度は相手の思考を相手の立場に身を置き直して、「何々さんの考えたことはこういうことじゃないかな」と言葉にする。それをするによって自分の思考のよさ、あるいは問題点に気づくことができます。自分のプロセスをお互いに言葉にして、先生の方も「今何々さんが話してくれたことってこういうことかな」と先生の言葉でもう一回組み立ててみんなに返していく。なんていうふうに、みんなで共有していくということが授業の中で一番重要なことでもあります。そして、それができればもうすでに解決していることが実際は多いのではないかなと思います。そして、「こういうことが分かったから次はどうしたらいいんやろ」なんて、次の予告を子どもたちと一緒に考えるということがあっていいなと思います。

繰り返しになりますが、忙しい先生、毎日5時間もあってそれぞれテーマを変えてやらなくてはならない。だから、なかなか準備ができないことがあると思います。それは重々分かっています。でも、その時に、教師の文脈だけじゃなくて、それぞれのところで子どもの文脈、思考の文脈に変えて考えていくってことは、ちょっと努力をすればできることがいくつかあるのではないかなと思います。何か新しい思考を頭の中にプラスしていくという話ではないんです。教科書をやりながら新しいことを覚える話じゃないんです。今まである思考を切り替える、子どものもっているものの考え方を「あっ、こっちの方がいいよなあ」って思えるようにならないと子どもは変わらないわけですよ。ここへの切り替えっていうことを考えていくってことじゃないでしょうか。

教師自身が授業での探究を楽しむ

続いて、楽しむこと、これが一番だと言いました。授業は、先生が楽しんでやらないとおもしろくないんです。おもしろくないような顔をした先生から受ける授業はどつまらない授業はありません。先生が「えっ」と思いながら「これ、なんでこんなになってるんや？」なんて言って授業を進めてくれると、もう子どもは楽しくて仕方ないんじゃないかなと思いますね。

今月の初め、伊那小で6年生の田中先生の授業を見ました。レーズン酵母を育てて焼いたパンを食べたいというような話です。この学年は4年生の時からパン作りをしていました。パンを焼いて食べたいと言うので、熱に強いレンガを購入して6個の窯を作って、毎回自分たちでどうやったらパンが焼けるかをやっていました。パンを焼いて食べるという活動を見た時に、いろんな発展の仕方がありますよね。パンの素になる麦、これを自分た

では、どうすれば学習観の転換ができるのか！

摂取⇔燃焼 覚える⇔創り出す	教えるのではなく一緒に創り出す
バランス	学習⇔発想・段取り・論理・表現・判断・記憶
身体との対話 子どもとの対話	子どもの文脈を大切に
楽しむ生活	教師が授業での探究を楽しむ
励まし合い・省察・ 相互調整	話し合える仲間

↓



レーズン酵母を育てて焼いたパンを食べたいな
 一静かになった酵母で発酵パンが焼けるかなー

2022.7.8伊那小学校
 6年山組 田中孝弘教諭の授業

ちで育てることからやってみようなんていうふうに、子どもたちがパンを焼いて食べる中で気づいて、自分たちの小麦粉を作ろうなんてところから活動する場合もあるでしょうし、焼くためには熱に強いレンガを購入しなければいけないけれど、「これって高いよね、お金を稼ぐためにはどうしたらいいんだろうか」とお金を稼ぐための活動を並行してやるなんてこともありますよね。いろんな活動の展開の仕方があって、どっちへ行こうとそれはいいわけですね。この場合は、この後天然酵母を使って焼くということに子どもたちの目が向いていきます。したがって、この耐熱レンガを買うお金は、子どもたちは空き缶を集めてお金にしていますが、それで足りるようなものじゃなくて、「先生に借金している」と言っています。ですから、卒業するまでにその借金を返さなきゃいけないということにどこかで気づいていくのではないかと思います。先生も「苦しい、苦しい」と言いながらやっておりますので、そういうことが出てくるのではないかと思います。

さて、このパンを焼くということについて、全員一斉にやらせるなんてことはできなくて、グループごとにそれぞれのペースでやっていきました。それぞれのペースを田中先生は尊重しながらやっていました。そうするとですね、様々な材に出あえますので、例えばこのグループは薪を作るということをやっていますが、そこはそこでおもしろかったり、そこで遊びが起きたりするんですね。他のことが起きちゃうけれど、大切なことは「パンを作る」という筋。これを外さないってことなんですね。いろんなことをやりながらも、いろんな生き方をしながら、でもみんなで大切にする筋はきちんとやっていくということができるといことが重要じゃないかなと思います。

一番生意気な男の子たちのグループは、外から見ていると半分遊んでいるように見えますが、偉いと思うのはちゃんと締めるところは締めてこの子たちはやっているんですね。自分たちが作ったものがどうしてうまくいかないのか、半分冗談を言いながら、でも考えています。この子たちの表情はイマイチ優れませんよね。パリパリの食感のパンを焼きたいのにネチネチしたタマゴパンみたいなパンができて、「ちょっと違うよね」というような表情をしています。焼き上がったパンを見て、「焼き過ぎちゃったよね、これ食べられないよね」と言っている子どもたちもいます。

パンを作るって難しいです。それも天然酵母からパンを作るなんて、天然酵母自体を作り出すのに非常にいろんな組み合わせがあります。それに加えてパンの発酵具合もいろんな具合があります。焼き方だって、先ほど見ていただいたように石窯で焼いているわけですから、なかなか調整が難しい。そうすると、自分たちの目指すパンを作るためには、途方もない組み合わせが起きてしまうのです。この途方もない組み合わせを調整する。普通、科学者だったらしらみつぶしに1個ずつ条件を潰していきながら正解を探す。でも、そういうわけにはいかないんですね。なぜかというと、「おいしいパン」も人によって違うんですね。「パリパリのパンがいい」と言う人もいれば、「モチモチのパンのパンがいい」と言う人もいて、日によってこっちのパンがいいということもあって、目標だって変わっちゃうんですよ。こういった中で何をやるかということ、ある条件で焼くと、こういうある条件の中でこういうことを大切に、これとこれを組み合わせるとこうなるんじゃないかと語れる力。ある事実をつなげて物語る、そういう力を子どもたちにつけようということになるかなと思います。

ちなみに、これをやるのに、例えば天然酵母といっても、イラン産のレーズンでやるか、中国産のレーズンでやるかで全然違うんですね。それに、発酵のプロセスが、まずレーズンをミキサーで混ぜ合わせて、それに消毒されたビンの中に入れて発酵させて、その発酵の具合を見ながら素となる種ができますよね。素となる種を今度はもう一度小麦粉の中に入れて発酵させていく中で、素となる種を素にした次の素となる種ができるわけです。それを使ってパンを焼くわけですね。非常に細かいプロセスがあります。

天然酵母つくりの条件(A/B/C/D/E etc.)

×

パン発酵のタイミング(A/B/C/D/E etc.)

×

石窯の焼き具合(A/B/C/D/E etc.)

⇒ 途方もない組み合わせが考えられる
(科学者だったら、しらみつぶしに実験する)
だが厄介なのは
ゴールとなる目標(おいしいパン)も一つではない

条件attributeを見つけ出し、
有力valueを組み合わせ実行し、物語る力をつけること

これをまず田中先生がやっているんですよね。自分で「こうやったらうまくいく、いやここはうまくいかないな」なんてことを試行錯誤しながら、非常に熱心に行っているんですよね。実は、子どもたちが「天然酵母のパンを作りたい」と言ったら「じゃあ、やろうか」となったのがスタートじゃないんです。子どもが「やりたいよ」と言った時に、先生は子どもには言っていないんですが、自分でどうやったらできるのかということを試しているんです。

- 田中教諭は、子どもたちと挑戦する前にイラン産レーズンと中国産レーズンで酵母づくりを試みている
- 田中教諭は、天然酵母のパン作りを県内のあちこちのパン屋に出かけ見学している
- 田中教諭自身が、酵母づくりの探究をする中で、気づいたこと見逃したことが、子どもたちの酵母づくりプロセスを見る目を鍛えている。教師の一喜一憂が、子どもたちの探究へのモチベーションを高めている
主体的な探究学習は、子どもと教師双方の探究プロセスの合作である⇒教師が探究を楽しんでいなければ授業にはならない

おまけに、天然酵母のパン作りを県内あちこちのパン屋に出かけて行って見させてもらっている。そういうことを先生がやっているんですね。そういうことをやっていると、実は子どもたちが所々で引っかかる、引っかかり方の意味が見えてくるんです。あるいは子どもがうまくできた時に、本当に素直に「おお、すげえ」という言葉になって出ちゃうんですね。自分がすごく難しかったことを、子どもたちがやってみせるわけですから、「おお、すごい」と自然に出ちゃいます。

子どもたちに、授業と向き合う時に、どれだけ先生と一緒に探究をして考えているかということがすごく重要になってきます。主体的な探究学習は、子どもと教師双方の探究プロセスの合作です。子どもだけの探究ではないんです。教師も同じようにやっていないとその探究のおもしろさは出てこないんです。新しいことを見つけ出していくということを教師自身が楽しんでいないと、授業は成り立たないというふうに思います。

それは、教科の中でもそうですよね。たし算、ひき算、こんなの分かっているじゃないか。いえ、分かっているんですよ。ひとつたし算、ひき算の仕方をするにしても、何年やっても後で発見するなんてことはいっぱいありますよね。そういうことがないと授業っておもしろくないなって思いますね。

探究するっていうことを止める時は、教師を辞める時だと思うんです。教師である限り、生涯学び続けていく。それが教師の専門性だっていうことを、やっぱりもう一度確認していく必要があるのではないかと思います。

ちなみに、総合で培った知識・技能は生きる上で役に立つか。天然酵母でパンを作れるようになることが生きていく上で役に立つか。まあ役に立たないですよね。それは、直接職人を育成しているわけじゃない。それが目標じゃないんですよね。じゃあ、総合のような学習で何を培っていくか。目標を創り出していくことなんですよ。私たちは目標を達成させる授業をしていますよね。目標は決まっていますそこにどうやって引き上げるかという授業をしていますけど、総合のような授業って、目標そのものを絶えず創り出していくんですね。これって人生と似ていませんか。生きていくっていうことなんですよ。生きていくといたら次にどうしたらいいのかって、目標を見いだしていくことなんですよ。

総合で培った知識・技能は生きる上で必要か
天然酵母のパンを作れなくても生きていける

総合で、私たちは何を培っているのだろうか

目標創成型授業 様々なレベルの目標を立てられること(AIと違う)
いくつもの時間を生きること(ヒトの生き方)
自分で考え実践したことを論理的に物語ること(思考・表現)
他者と認識と情感を確定共有すること(共有する世界を作ること)

それから、いくつもの時間に生きているんです、人って。さっき、ちゃらんぽらんにやっている男の子たちがいるって言いました。でも、あの子たちはそうやってその時その時の材に気づいて、そのおもしろさでちょっと遊ぶんですね。そういう生き方もしながら同時に「でもパンを作りたいんだ」ということもちゃんと押さえているんですよね。そうやっていくつもの生き方を一つの授業の中でやっていくということじゃないかなと思います。

そして、語れるようになるということなんですね。語れるようになるということは、論理的にものを考えられるということでもあります。何よりも重要なのは共有できる世界をつくり出していくということなんですね。「これをやるとこうなるよね」「これって楽しかったよね」とって人と人との中で、先生と子ど

もの間で、何かを作り出して共有できた世界をつくり出していくってということが、人が社会の中で生きていく上で極めて重要なことです。そんなことを子どもたちとともにやっていく活動じゃないかなというふうに思います。

話し合える仲間 ― 教師は一人では育たない ―

ちょっと話がそれてしまった上に時間になってしまったので、もう一つ話し合える仲間ということについて簡単に話して終わりにしたいと思います。

教師は専門職です。専門職とは経験から学ぶ人です。経験から学ぶって言うことは、自らがやっていることを絶えず、絶えず問い直して自分の教育観や発達観、そこに投げかけて専門職としてのアイデンティティの捉え直しを、限りなく、絶え間なくやり続けていく人のこと言います。経験から学ぶということですから、省察的実践者ということでもありますし、学び続けるのが教師の専門性です。これは生涯ずっと先生である限りやり続けることでもあります。

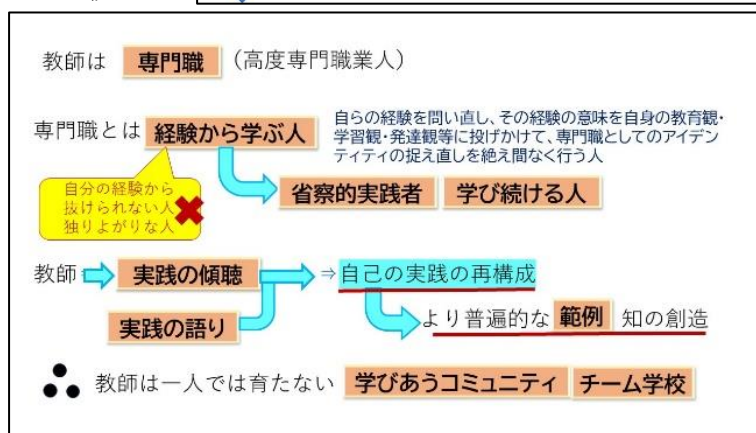
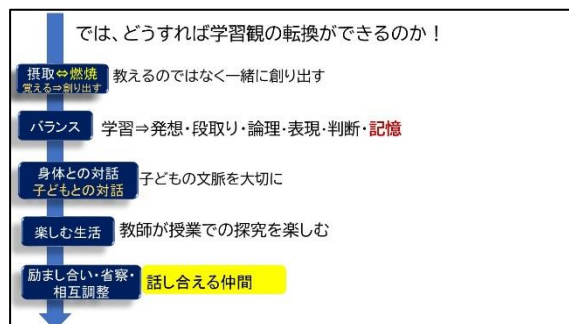
ただ、経験から学ぶと言うと、先生は独り善がりになっちゃうんじゃないとか、他の人の言っていること学ばないのか、あるいは自分の経験の中から抜け出せないのではないかと思われてしまいますが、決してそうではありません。教師が人の実践について聞いている時に、だまって人の実践を聞いているような教師はいないんです。人の話を聞いたら、頭の中

では半分は自分の実践のことを考えているんです。専門職はみんなそうです。他の専門職の話を聞けば自分のやっていることをだいたい振り返っているんです。そして、「似たような経験は自分の中にもあったな」「あの時うまくいかなかったのは、今話してくれているこの人のこういうところを自分はやっていなかったからじゃないか」「もう思い出したくもない嫌な経験だったけど、よく考えてみればそのことを入れて考えればすごく意味のある実践だったんじゃないか」なんていうふうに、自分の経験を作り直しているんです。経験を作り直していくっていうのは変かもしれませんが、経験の意味を再構成しているんです。そうやって自分を動かしていく範例を自分の中にたくさん培っていくということが熟練化していくということです。範例を作り出していくということです。

これは、実践を語る場合にも同じことが起きています。つまり、教師は一人では育たないのです。学び合うコミュニティがある、あるいはチームがあるということが重要になってきます。

実践をし、それを対話を通してみんなでも振り返り、自分でもう一度振り返る。これを限りなく繰り返していくということが重要になってきます。そして、それを支えているのが校内の研修です。校内の研修がどうあったらいいのかということについては、また機会があったらお話ししたいと思います。

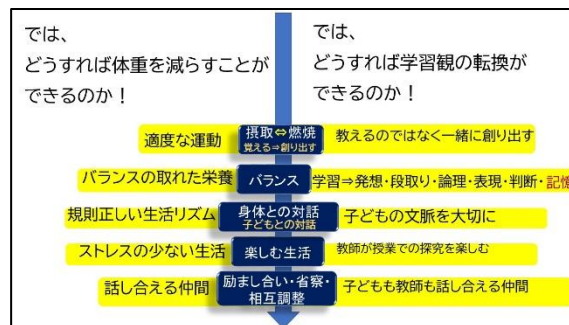
語るということ、あるいは聞くということ、読むということにはどんな意味が



あるかということについては、またの機会にお話ししたいと思います。

おわりに

もう一度振り返っておきたいと思いますが、体重を減らしていく中で、減らそうとした時に必要になった5つのこと、これは学習観を転換していくという意味でも極めて重要だということ、そのことを先生方と共有できたことについて、今日はお話しさせていただいたというふうにしたいと思います。



(文責：岡谷市教育委員会 教育総務課 主任指導主事 濱 敦志)